

原 著

思いやりの心を育てる道徳教育考
—ペスタロッチーの心情陶冶論に着目して—

A study of the moral education raising altruism

— Focus on Pestalozzi's Herzbildung —

光田 尚美

要約：本稿は現代の子どもにおける「愛他性」不足という指摘を踏まえ、その克服を教育課題として再定位すべきとの問題関心から、ペスタロッチーの心情陶冶論を考察した。まず、「愛他性」の発達に関するペスタロッチーの理解を、「愛」の概念についての独自の解釈から導出した。「愛」は好意的な情調をその発展の端緒とすること、主体が好意的に振舞える範囲を拡大しつつ道徳的な意志の力を発展させること、そして意志の力で醇化された好意を「愛」と呼ぶべきことなどが確認された。ペスタロッチーにおいては、「愛」の発達過程を軸として形成・教育の課題が論じられるが、とりわけ「愛他性」の発達を決定づける作用として、養育者の働きかけと子どもの共同性が注目されている。本稿ではそれぞれの作用に期待される機能の内実を明らかにするとともに、そこから今日の道徳教育に対する示唆を導出した。

Key Words：愛他性，愛，好意的な情調，道徳的な意志，子どもの共同性

I. 問題の所在

「愛他行動 (altruistic behavior)」を動機づける「愛他性 (altruism)」は、人間の道徳性を規定する概念のひとつであるが、この「愛他性」が現代の子どもには不足しているのではないかとの認識から、道徳教育の意義や方法論を再検討する必要が叫ばれている。こうした指摘を受け、本稿では「愛他性」を育む教育の手がかりをペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746～1827) の心情陶冶論に求め、そこから「愛他性」の形成過程に敷衍されるところの論理がいかに導き出されるのかを考察するとともに、その意義を道徳教育の今日的課題に照らしながら評価したい。

「愛他行動」とは、外的報酬を期待することなく、他者のためになるうと内発的に動機づけられた利他的行為を指す。他者に利益をもたらす自発的の行為という意味において、「向社会的行動 (prosocial behavior)」や「援助行動 (helping behavior)」に含まれることもあ

る。しかし一般には、行為者の動機に「他者を思いやる」、あるいは「他者のために何かをしたい」といった意識が働いている場合に限定される¹⁾。

「愛他行動」については、主に発達心理学の領域において実証的な研究が進んでいるが²⁾、近年、特に我が国の中・高校生の「愛他性」の低さが問題視されてきている。中里らの調査によれば、日本、中国、韓国、トルコ、アメリカの五カ国の中・高校生を比較したところ、日本の若者のレベルが総合で最も低かった。また、中学生と比較して高校生の方がより低いレベルであることも明らかとなった。それ以外にも、「愛他行動」が及ぶ範囲の狭さや理性的な動機に基づく意識の低さなどが顕著となった³⁾。このことは、特に我が国の教育環境において、他者との情緒的つながりによる共感性の育成や理性的な判断能力の訓練に資する学習が十分になされていないことを示しているのではないかと指摘されている。

「愛他行動」はもとより、それを動機づける「愛他性」が不足しているということは、他者を思いやり慈しむ心情、社会的責任や義務の意識に欠けるということでもある。こうした事態は、人間社会を守り育ててきた伝

2008年12月5日受付／2009年1月21日受理
Naomi MITSUDA
関西福祉大学 社会福祉学部

統的価値の崩壊、ひいては人間性そのものの崩壊を招くことにもなりかねない。その重みを真摯に受け止め、「愛他性」の形成を中核とした道德教育の問題を子育てや保育、教育の課題として再定位していくことが望まれよう。

そこで、ペスタロッチーの心情陶冶論が注目される。彼は『シュタンツだより (Pestalozzi's Brief an einen Freund über seine Aufenthalt in Stans, 1799以下、『シュタンツだより』と略記)』のなかで、孤児たちが近隣の村の惨事を我がことのように受け止め、手を差し伸べようとした挿話を紹介している⁴⁾。自己の不利益を覚悟のうえでなお、困難な境遇にある他者を援助しようとする彼らの姿勢は、純粋な「愛他性」に動機づけられた「愛他行動」の発露と見なすことができよう。また、クラフキー (Klafki, W.) が「教育学的限界状況 (eine pädagogische Grenzsituation)」⁵⁾と表現したように、孤児院に収容された当初の子どもたちは、まさに人間性の危機に瀕していた。彼らが「愛他性」を育み、その心情や行為において利他を追求しようとするまでに成長していく過程は、道德教育の本質を示しているともいえる。

こうした実践をはじめとして、ペスタロッチーは今日的課題に呼応する諸論を展開している。そこで以下、彼が「愛他性」の発達過程をどのように捉え、その形成機能を何に求めたのか、また、その意義についてどのような主張を展開したのかを整理していきたい。

II. ペスタロッチーの心情陶冶論における「愛他性」の発達過程

「愛他性」や「愛他行動」という言葉を用いていないが、ペスタロッチーは諸著作のなかで、感情の全領域における「愛 (Liebe)」の優位性を繰り返し訴えている。そこで、この「愛」についての言及から「愛他性」にかかわる論理を抽出したい。例えば彼は、「教育のためのジャーナル (Journal für die Erziehung, 1807)」のなかで次のように述べている。

「人間の感情の全領域において、子どものうちなる愛の感情は、人間本性の気高い感覚の本質をただ純粋に表す感情であり、それによって他のすべての感情が、我々の本性の気高い感覚でもって、我々自身をその全範囲において調和のうちに保持するために秩序づけられ、導かれ、活気づけられ、そして制限されなければならないところの中心点である」⁶⁾。

ここに示されたように、「愛」とは「人間本性の気高い感覚の本質 (das Wesen des höhern Sinnes der Menschennatur)」を表す感情であり、人間本性を「調和のうちに保持する (in Harmonie zu erhalten)」ための核となる。ペスタロッチーによれば、この「愛」を人間本性のうちに目覚めさせ、発展させることが心情陶冶の目的とされるが、まさにそれは人間本性を「調和 (Harmonie)」のうちに完成させることにほかならない。それゆえに、心情陶冶は教育の究極の目的として位置づけられるのである。

それでは、「愛」が発展していく過程はどのように捉えられているのだろうか。ペスタロッチーの心情陶冶論を概観すると、子どものうちに「好意的な情調 (wohlwollende Gemütsstimmung)」が生まれ、それが質的に転換していくという段階的な過程が導き出されるとともに、「愛」の概念規定についての独自の解釈が示される。以下、この段階的な過程を「愛他性」の発達過程へと敷衍し、その内実を明らかにしていきたい。

1. 第1の段階—好意的な情調の目覚め

クラフキーが指摘するように⁷⁾、子どもが他者を愛し、その愛をもって行動することができるようになるためには、何よりもまず、彼の心のうちに「愛の芽 (Keim der Liebe)」が芽生え、育ちゆかねばならない。ペスタロッチーによれば、「愛」の原初は好意的な情調に求められているので、第1の段階は好意的な情調の目覚めとして特徴づけられる。そしてそれは、「目覚める (erwecken)」とあるように外から与えられるものではない。その原理は次のように説明される。

『ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか (Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, 1801)』のなかで、ペスタロッチーは「愛がいかにして人間のうちに生み出されるか」と問い、それが「幼な子とその母親の間にある関係から主として生み出される」⁸⁾という回答を導き出している。すなわち、養育者 (母親) が幼な子の世話をし、守り、喜ばせることが、「信頼 (Vertrauen)」や「感謝 (Dank)」の感情とともに「愛の芽」を芽生えさせるのである。さらに、養育者の世話や庇護が「愛」をもってなされることにより、「愛の芽」はよりいっそう鼓舞され、「愛」を生じさせるための基盤を形成することもまた確認される。

そこで次に、この「愛の芽」がどのように育ちゆくのか、という問いが投げかけられる。ここにおいてペスタ

ロッチーは、幼な子と母親との関係における情緒的な結合とそれによって育まれる共感性に注目している。

2. 第2の段階—他者に対する見方の変化と関係性の拡大

好意的な情調が養育者との間に共感を生じさせることを捉えて、ペスタロッチーは次のように述べている。

「子どもは母親と同じように見える者を愛する。（中略）子どもは母親の姿に微笑み、人間の姿に微笑む。母親が愛する者をまた、子どもは愛するのである。（中略）このようにして人間愛の芽が、同胞愛の芽が、子どもの心のうちに育っていく」⁹⁾。

ここに示されているように、養育者との共感性が「愛の芽」を「人類 (Geschlecht)」や「同胞 (Brüder)」に対する「愛」へと発展させる。しかし、共感性が生まれているというだけではいまだ兆しにすぎない。子どもが「愛しつつ行動できるところの範囲を拡大する」¹⁰⁾ ようになってはじめて、それは他者への「愛」へと育ちゆくのである。

そのためには、養育者を媒介とする意味づけを超えて、他者に対する新しい「見方 (Ansicht)」が獲得されなければならない。ペスタロッチーによれば、子どもはその自我の発達とともに、「ヤーコブにおいて父の兄弟を、ハンスにおいて父の下男を認め」、「人々を区別し」¹¹⁾、「人間を、自分が未熟で頼りなかった頃に属していた関係から分けて熟視するようになる」¹²⁾。しかし、そうなるまでに彼が認めていたのは、「母親と同じように見える者」や「母親が愛する者」、すなわち無条件に自らを助けてくれる養育者と同じ本性を有する者であった。「この時期の子どもは、周囲の人たちは自分を喜ばせ、助け、尽くす者であると認めるようになる。彼はこの唯一の関係のほか、人類との関係を知らない」¹³⁾。しかし、新しい見方が獲得されることによって、自分を助けてくれる者として以外の他者の存在が理解され始めるのである。それとともに、これまで当然のこととして受けていた他者の注意や労苦が「父母の誠実 (Vater- oder Muttertreue)」や「仲間の同情と愛 (Theilnahme und Liebe seiner Mitmenschen)」¹⁴⁾ から導かれたものであることもまた感じとられるようになるというのである。

ペスタロッチーによれば、子どもが他者に対して好意的に振舞えるようになるのは、こうした理解によって刺激されるからである。とはいえ、それは他者の好意に対する仕返しにすぎない。そこでさらに、いかにしてそれ

が「愛」と呼ぶに相応しいものとなりうるのかが問われるのである。

3. 第3の段階—醇化された好意としての「愛」

ものごとがその本来の姿へと収斂されていく過程を、ペスタロッチーは「醇化 (Veredelung)」と呼ぶ。好意的な情調が「愛」となることもまた、彼は「醇化」の概念で説明する。

「私はこの好意の本性を探究する。そして好意がその本質において感覚的で、動物的であることを見出す。しかし私は、私の心の奥底において、この好意を醇化する一種の力を私自身のうちに見出す。そしてそのように醇化された好意を、私は愛と呼ぶ」¹⁵⁾。

ペスタロッチーによれば、好意を醇化するところの力とは、道徳的な「意志 (Willen)」の力を意味している。それは、人間をして自己自身を醇化せしめようとする力であるとされる。そして好意的な情調が「愛」となること、すなわち「愛」への醇化はまさにこのような力が発揮されていく過程として、次のように言及される。

「愛」への醇化には、好意的な情調がその動物的な感覚から質的に転換すること、すなわち人間本質を規定する道徳性へと開かれることが求められる。しかし、自然の発展にこれを期待することはできない。あくまでも「私 (Selbst)」が、動物的な感覚に付随する弱さ—「無力 (Ohnmacht)」, 「無思慮 (Gedankenlosigkeit)」, 「自己自身の快樂への渴望 (Lechzen nach eigener Behaglichkeit)」¹⁶⁾—を「意識 (Bewußtsein)」の俎上に乗せ、その弱さから自己自身を解放するよう切望することが肝要である。ここにおいて活気づけられるのが、道徳的な「意志」なのである。

ペスタロッチーの理解において、「愛」は人間本性を規定するところの核である。したがって「愛」への醇化は、その本質において必然的に、「私」が自律的に人間性を高め、道徳性へと開かれていく段階を辿る。そうとなれば、道徳的な「意志」の力が強化されることによって、「愛他性」の本質もまた道徳的に高次の段階へと発達するのだといえよう。道徳的な「意志」とはすなわち、自己の利益を求めるよりも他者の利益を優先すべきと確信し、それを追求する努力の源となるのである。

III. 「愛他性」の形成に求められる機能とその意義

前項の発達過程を軸として「愛」の形成論が展開され

るのだが、ペスタロッチーが繰り返しその重要性を訴えるのは、それに先行すべき養育者の機能である。なるほどその意義は、彼によって新たに発見されたものでも科学的に実証されたものでもない。しかし、近代教育の幕開けという時代における彼の指摘は先駆的な着眼であり、かつ実践知に裏打ちされた哲学的洞察の成果として評価されるべきものであろう。

さらにここでは、子ども同士のかかわりのなかで生まれる共同性の原理の意義にも注目したい。ペスタロッチーの実践において、子どもたちの反省的熟考の過程に具現化されているこの原理は、養育者との関係に留まり、受動的な立場でいる限りにおいては成しえない「愛」への醇化を可能とする教育的な作用として評価するものではないかと考える。

以上を、ペスタロッチーの心情陶冶論における「愛他性」の形成機能とみなし、以下、彼の論ずるところを整理していきたい。

1. 「愛他性」形成の先行要因：養育者に期待される機能

ペスタロッチーにおいて、養育者の存在及びその機能は「愛」への醇化を促す最も重要な刺激であるとみなされている。それは「父母の心尽くし (Vater- und Muttersorg)」や「母の誠実 (Muttertreu)」、あるいはその機能を本能的、感性的なものとして特徴づけるような「父母の感覚／父心・母心 (Vatersinn, Muttersinn)」、「母の目 (Mutterauge)」と「父の力 (Vaterkraft)」などの象徴的な概念でもって説かれているが、その内実はいかなるものであったのだろうか。

(1) 情緒的な結びつきを強化し、共感性を育成する

すでに述べたように、ペスタロッチーはその心情陶冶論において、「愛の芽」となる好意的な情調を芽生えさせるのは、主として母親に象徴されるところの養育行動であると捉えている。それによると、子どもの日々の欲求をその都度、子どものしぐさや表情から直接に読み取る「母の目」¹⁷⁾や、言葉として表されえないこうした欲求に対して応えることを「せずにはいられない (sie kann nicht anders)」¹⁸⁾ 母親の養育行動は、「愛の芽」と同時に「信頼 (Vertrauen)」や「感謝 (Dank)」といった心情もまた喚起する。それらは母親への「愛着 (Anhängigkeit)」を形成し、母親との情緒的な結びつきを強くする。

母親への「愛着」は、その言葉の意味において「同調 (Anhang)」から導かれる。したがって母親との情緒的な結びつきとは、母親の心情や行為に子どもが心服し、依存している (anhänglich) こと、あるいはそれに係属する (anhängig) ことを意味する。そうして感情の共有、すなわち共感性が生み出され、子どもは「母親の愛する者を愛する」と結論づけられるのである。

(2) 人間関係の意味を対象化し、本質を直観させる

母親に庇護される幼な子ども、いつまでもその状態に留まっているわけではない。彼はやがて両親の手を離れ、自らの世界を広げていくようになる。ペスタロッチーはここにおいて、子どもの好意的な情調をより一般的な他者へと広げていくための一つの契機を見出し、それを促す機能もまた、養育者に本来的に期待されるものとみなしている。

すでに指摘したように、自らの世界を広げていくにつれて子どもは、養育者を媒介として認識していた他者を新たな関係性のもとで捉え直さなければならない。その際、子ども自身と彼を取り巻くより広い世界との関係を取り結び、「家庭生活」から「市民関係 (die Bürgerverhältnisse)」の意味を彼の眼前に開いてやるような作用が必要となるのである。

ペスタロッチーによれば、「あらゆるよき人間教育は (中略) 本質的に、教育者の力が純粹で、家庭生活の全範囲にわたって活気づける父の力であることを要求する」¹⁹⁾。ここでいう「父の力」とは、家庭生活が本来的に有するところの教育機能を十全に発揮できるよう、その全体にわたって「活気づける (beleben)」ものとされている。そして、それによって期待されているのは、最初の人間関係を築く場であり、社会関係の基盤でもある家庭生活を通して、子どもに自ら経験することがら—他者との関係性を含めて—の本質を直観させることである。こうした経験が積まれてはじめて、子どもは「彼の民族に対する拡大された円」、すなわち拡大された世界におけるさまざまな関係性を「彼が未熟な頃に狭い家庭的関係を包んでいたあの愛でもって生かす」²⁰⁾ ことができるようになっていくのである。

(3) 義務の感情を生起させ、道徳的責任の遂行可能性を自覚させる

他者への認識が変化するとともに、他者の立場や境遇を思いやらなければならないとの意識が導かれるように

なる。ペスタロッチーはそこに、養育者のさらなる機能を期待する。それは、「自我の発達の最初の基本的な特徴」²¹⁾である「義務 (Pflicht)」の感情を子どものうちに芽生えさせ、自己の存在の意味や役割を自覚させるというものである。

ペスタロッチーによれば、母親との関係において「愛の芽」が芽吹くように、父親との関係においては「義務」の感情が生まれるのだという。彼は『隠者の夕暮 (Die Abendstunde eines Einsiedlers, 1780)』において、次のように述べている。

「父のパンを食べ、父とともに炉の前で暖をとる息子は、この自然の道において、子どもの義務のなかに、彼の本質の祝福を見出す」²²⁾。

「彼の本質の祝福を見出す (findet den Segen seines Wesens)」とあるように、子どもは「義務」の感情のなかに、神が与えた祝福、いわば人間としての正しい道や倫理的な原則を発見するという。その意味において「義務」は、「愛着」から生み出される場所の好意に道徳的な価値を示すものであるといえる。

ところで、ペスタロッチーのいうところの「子どもの義務 (Pflicht des Kindes)」とは何か。『ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか』において、彼は「義務」の萌しについて言及している。それによると、自我の発達とともに子どもは、「母親はただ自分のためにだけこの世にいるのではない」こと、そして「万物も自分のためにこの世にあるのではない」ことを知るようになる。さらにこのような気づきから、「子ども自身もまた、ただ自分ひとりのためだけにこの世にいるのではない」²³⁾との思いが目覚める。そこから子どもは、「誰か」、あるいは「何か」のために自分自身がどうあるべきか、すなわち自らの社会的な役割を引き受けるべきことを自覚し始めるというのである。

こうした「義務」の感情は、子どもが身体的にも精神的にも発達することによって生じる「自分自身を助けることができるという満足の感情 (ein Gefühl der Befriedigung sich selbst helfen zu können)」²⁴⁾と相俟って、「誰か」、あるいは「何か」のための具体的な行動を生み出す原動力となろう。『隠者の夕暮』においてペスタロッチーは、こうした感情の芽生えが—それはいまだ感覚的な、漠然としたものであるのだが—父親が日々の糧や快適な環境を与えてくれることに象徴されるような、養育者との日常的な触れ合いのなかに見出されることを指摘したのである。

2. 子どもの共同性にもとづく反省的熟考

ペスタロッチーによれば、養育者の機能はいわば「本能的な感情的な触れ合いの単なる結果」²⁵⁾にすぎない。また、養育者との関係においては、子どもは常に受身的である。それゆえに、「愛」への醇化が能動的な「意志」の力に拠るものであるとみなすならば、養育者の機能には限界があるといわねばならない。しかしながら、ペスタロッチーは自らの実践において、その克服の方途を打開している。それはすなわち、共同性の発見である。

ペスタロッチーは『シュタンツだより』のなかで、子どもたちがともに生活を始め、共同体を築き上げていくことで生じた感情を生かして、彼らを互いに「兄弟姉妹にさせた (zu Geschwistern machen)」と述べている²⁶⁾。クラフキーが指摘しているように、「兄弟姉妹としての感情」は、養育者への「愛着」のように受動的に経験される配慮からではなく、子ども同士が主体的に交わり、助け合い、配慮し合うという能動的な共同のなかで形成される。それは、個々の子どもの好意的な情調を子ども同士の関係の全体へと拡大し、「共同体の秩序 (Gemeinschaftsordnung)」を構築していくものと捉えられている²⁷⁾。そこでペスタロッチーは、この共同性の原理を心情陶冶の方法論に援用しようとしたのである。なぜなら、そこには受身的立場では経験されえない、むしろ子どもたちに自らの本質を見つめ直させるような機能が期待されるからであり、まさにその機能こそが、「愛」への醇化にとって不可欠の道徳的な「意志」を発動させるからである。

シュタンツの教育実践において、こうした試みは道徳をめぐる対話を軸として展開されている。具体的には、日々の生活において直面する道徳的な課題について、子どもたちがペスタロッチーとともに熟考し、その成果を共同体の価値として承認するというものであった。その過程において子どもたちは、課題の解決に向けて反省的熟考を展開し、おのずから道徳的な「意志」の力を働かせていくのである。

それでは、熟考を通して子どもたちはどのような経験をしたのだろうか。また、その経験は「愛他性」の形成という主題にかかわって、どのような意味を有するのだろうか。以下、『シュタンツだより』の記述を手がかりに考察していきたい。

(1) 自己の弱さと対峙する子どもたち

反省的熟考において、ペスタロッチーは子どもたちに、彼らが現在、あるいは未来の状況において直面すると思われるところのさまざまな命題を提示したうえで、彼らの「自由な判断 (freies Urtheil)」を求めたと報告されている²⁸⁾。そうした事例のひとつとして、アルトドルフの子どもたちの取容をめぐり、施設の拡張という冒険を選択するか否かを問うた場面がある。

アルトドルフの町が戦禍に見舞われたとき、ペスタロッチーは子どもたちに戦災孤児の受け容れを提案した。彼らは即座に、「そうしましょう」と答えた。自分たちと同じ経験をしたアルトドルフの孤児たちに同情したのである。

子どもたちのうちに、好意的な情調と他者の境遇や環境に対する共感性とが培われていることを確認したうえで、ペスタロッチーはさらに問いかける。「おまえたちが熱心に望んでいることを考えてごらん。それを望んでも私たちの施設にはそれほど多くのお金があるわけではないし、かわいそうな子どもたちのためにこれまでよりも多くのお金を得ることが確かなわけでもないだろう。だからおまえたちは、授業のかわりに、彼らのために働かなければならないし、食べる物も少なくなるし、さらには着る物も分けてあげなければならなくなるかもしれないよ」²⁹⁾。そして、こうした不利益を引き受ける覚悟なしに是と答えるべきではないと、ペスタロッチーは強い口調で締め括ったのである。

このような問いかけでもって、ペスタロッチーは子どもたちに反省的熟考を促したのである。自らの選択がもたらす結果を突きつけられて、子どもたちは自らの義務や責任の意味を問い直さざるをえなかったであろう。そこで彼らは、その心の奥底に住まう「我欲 (Selbstsucht)」³⁰⁾の存在に気づかされ、たちまちそれに従うのか、あるいは自己の不利益を引き受けてなお社会的な責任を遂行するのかという葛藤のなかに置かれたはずである。

『シュタンツだより』では、提案は毅然として受け入れたと報告されているが、子どもたちはいかにして決断するにいたったのか。そこには、彼らの道徳的な「意志」の力が作用していたと考えられる。ペスタロッチーによれば、この「意志」を育てることもまた、子どもたちの反省的熟考にゆだねられるのである。

(2) 規範を意識化し、道徳的判断の尺度を確保する子どもたち

ペスタロッチーが提示する道徳的課題には、次のようなものもあった。

「おまえたちは貧しい者に助言をしたり、苦しんでいる人々の困窮や悲惨に手を差し伸べたりする以外に、偉大なことや美しいことについて何か知っているだろうか。こうしたことを理解もせず、それができるだろうか。おまえたちはどんなに立派な心を持っていたとしても、無知であるがゆえに、すべてを成り行きにまかせざるをえなくなるのではないだろうか。しかし、おまえたちが多くのことを知っていたならば、それだけ多くの助言をすることができる。また、さまざまなことをわかっていただければ、それだけ多くの人々をその困窮から救い出すことができるのだ」³¹⁾。

クラフキーが指摘しているように、ペスタロッチーは子どもたちの「自由な判断」を求めつつ、規範となるべきことがらを先取りし、彼自身の考えとして提示している³²⁾。それは中立的で、かつ暗示的な問いのかたちで差し挟まれているが、模範となる実例として受容されていることがうかがわれる。

孤児院の子どもたちのなかには、ペスタロッチーの言葉を正確に理解することの困難な年少児もいた。そのために、子どもの理解の力が育つ前に規範を先取りし、提示してやることはやむをえなかったといえる。しかし、それを道徳的判断の尺度として定位させるものは、ペスタロッチーの暗示的な問いだけではなかった。彼は次のように報告している。

「私は子どもたちが額にしわを寄せることには我慢できなかったのだが、彼ら自身で額を滑らかにこすり、微笑み合い、互いにしわを寄せるのをはばかりようになったのである。／子どもの数が多かったために、何が美しく、何が醜いのか、何が正しく、何が正しくないのかを彼らに直観させる機会は、毎日彼らのなかにあった」³³⁾。

この引用からもわかるように、孤児院では、ペスタロッチーの示す規範は、子ども同士の触れ合いのなかでその意味を確認されるというのが常であった。そのなかで彼らは、提示された規範の価値や意味についての自らの理解を突き合わせ、その差異に触発されるかたちで反省的熟考を展開していったと考えられる。

なるほどここでの熟考は、ペスタロッチーの考えを問い直すような批判的契機を含むものではなかった。しかし、子どもたちが共同して生活するなかでは、「他者を

思いやること」や「いたわること」などの本質的な意味が現実のものとして直観される。つまりペスタロッチーの考えは、体験の直接性からまったく乖離した言葉や概念として強制されるものではなく、個々の体験や感情に結びついたものとして直観されるのである。したがって、ここで展開される熟考は、直観された価値を体験から引き離して吟味し、それによって導かれた「多くの包括的な概念 (viel umfassende Begriffe)」を道徳的判断の尺度として確保する試みなのである。

ペスタロッチーによれば、道徳的判断の尺度が確保されてこそ「賢明な心的態度や確かな意志の強さ (weise Gesinnungen und standhafte Entschlossenheit)」といったものが育てられる³⁴⁾。つまり、子どもたちの熟考には彼らの道徳的な「意志」の力を補完する働きがあるというのである。そして、葛藤状態の克服の成果として「当為 (Sollen)」が選択されるならば、彼らの「意志」の力はいっそう強化される。そうしてはじめて、彼らの好意的な情調は、もはや孤児院の仲間に対しての限られた感情ではなく、より広い社会的なつながりにおいて道徳的責任を喚起されたもの—純粹に動機づけられた、ときに自己犠牲を伴うような「愛他性」—として確認されるのである。

IV. おわりに一思いやりの心を育てる道徳教育考—

最後に、以上の考察から導かれる原理に、今日の道徳教育への示唆を求めたい。

ペスタロッチーが明らかにした「愛」の発展過程は、「愛」が道徳に対して開かれた人間本質を規定するとの認識から、道徳的陶冶の段階に沿って洞察されている。そこでまず、「愛」は外から与えられず、子どものうちにおのずから芽生えるものであること、しかしその萌芽はいまだ「愛」ではなく、好意的な情調にすぎないこと、さらに他者との関係性の意味が子どもに理解され、他者の立場や境遇が慮られていくにつれて、好意的な情調は養育者への「愛着」を超えて働くようになることなどが確認された。そして、このようにして発達した好意的な情調が、道徳的な「意志」の力により、自己の欲求に惑わされることなく発揮されるに至ってはじめて、「愛」と呼ぶべきものとなることが示されたのである。

こうした「愛」の発展過程を「愛他性」の発達に敷衍し、道徳教育の課題とするならば、以上のような発達を促す、あるいは決定づける場所の形成的な働きかけが注目される。ペスタロッチーの心情陶冶論においては、

養育者の養育行動や子どもたちの反省的熟考が、ここでいうところの形成的機能を担うとされている。

ペスタロッチーによれば、養育者と子どもとの情緒的な結びつきから「愛の芽」が芽生え、育ちゆく。それゆえに、情緒的な結びつきを形成する養育者の行為は何よりも重要視されるのである。それはもはや特筆されるべき知見ではないかもしれないが、ペスタロッチーが心情陶冶の優位性を説き、そのなかで養育者の機能に注目した背景には、産業革命の影響によって大きく変化していった民衆の生活様式への懸念、すなわち、それに伴う、人心の荒廃や伝統的家庭の崩壊への危惧があったのである³⁵⁾。このことを超歴史的に問うことはできないが、人間社会が守り育ててきた伝統的価値を継承することの意義を鑑みれば、人の育ちの原点に今一度回帰することも必要なのではないか。ペスタロッチーの示唆は、当然のこととして看過されがちなこの地平を照らしている。

ペスタロッチーが養育者に期待する場所の機能はまた、次のような示唆を与えてくれている。それはすなわち、「愛」の発展における知的側面、いわゆる「精神 (Geist)」の力³⁶⁾の活用である。

子どもはやがて養育者以外の他者を認識し、彼らが自助のためにのみ存在しているのではないと知る必要がある。それはいまだ、具体の他者を認識するものであるのだが、本質を直観する精神の力によって、一般化された他者、あるいは匿名の他者との関係性へと敷衍されなければならない。ペスタロッチーはこのことを捉えて、社会関係の基盤となる家庭生活を活気づけ、それが本来有するところの教育的機能—ものごとの本質を直観させる機能—を働かせることもまた、養育者に求められねばならないと説いたのである。

加えて、「義務」の感情を喚起するという視点はキリスト教的精神のあらわれともいえるかもしれない。しかし、「愛他性」を発動させるものの一つとして「義務」があることもまた等閑に付すことはできない。道徳的責任を引き受けるという意味において、「義務」の感情を喚起する父性的機能の意義を再評価する必要があるだろう。

さらにペスタロッチーは、子どもの共同性の意義に注目し、反省的熟考が「愛」の発達を促すことを、実践を通して明らかにしている。そこでは、道徳的な「意志」の涵養や道徳的判断の形成が期待されたのだが、それによって道徳教育にとって重要な観点が示されたといえよ

う。すなわち、道徳教育は単純に情緒の問題に帰せられるのではないこと、むしろ精神の力を拠り所とし、理性的な能力を積極的に育まなければならないことが明らかとなったのである。また、こうした理性的訓練については、養育者との関係性においては限界があることも指摘されている。それは翻って、道徳的な指導場面における集団思考の組織化の有効性という意味において、学校教育の可能性を開くものではないか。心情陶冶における共同性への注目は、それを首肯するものであるといえる。

もはや古典といわれるペスタロッチーの思想に、今日の課題に「直接に」答える解答を見出すことはできず、むしろその限界が指摘されるべきだとの声もある。しかし、今日の教育学的思考への刺激というかたちで彼の思想を継承し、そこに有意味なメッセージを読み取ることもまた、ペスタロッチー研究の一形式ではないか。本稿がその一助となればと考える。

V. 注及び参考文献

- 1) Vgl. Eisenberg, N. *The development of reasoning regarding prosocial behavior*. In : *The development of prosocial behavior*. Academic Press. 1982./Eisenberg, N and Mussen, P. H. : *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge University Press. 1989. 「愛他性」や「愛他行動」の定義については、行動の意図(目的)と動機(理由)という観点から「向社会的行動」の一部として規定したアイゼンバーグ(Eisenberg, N.)らに拠っているが、意図や動機は客観的に測定しえないことから、「他人に望ましい結果をもたらす社会的行動」を総じて「愛他行動」とする定義(Rushton, J.P.)もある。また、「愛他性」に動機づけられたように見える行動であっても、実際には利己的に動機づけられているとする説(Batson, C.D.)や、さらには困窮者を見ると感じる苦痛を除去するために他者を利する行動が生起するという「否定的気分除去仮説(negative state relief hypothesis)」を唱える研究者(Schaller, M & Cialdini, R.B.)もいる。
- 2) 中村陽吉・高木修編著『「他者を助ける行動」の心理学』光生館、1987年を参照されたい。「援助行動の発達」について、中里は次のような過程を明らかにしている。①養育者との情緒的つながりによる共感性の活性化(～2歳)、②共感性によって喚起される愛他的動機の発達(～6歳)、③愛他的な規範認知とされる互惠性、社会的責任の学習および愛他行動の内面化・安定(～10歳)、④道徳的判断力の増長から高次(自己犠牲を伴うような)の愛他行動への発達(10歳以上)。
- 3) 中里至正・松井洋編著『異質な日本の若者たち—世界中高生の思いやり意識—』ブレーン出版、1997年を参照されたい。中里らが指摘しているように、「愛他行動」を実際に遂行する頻度は年齢の上昇とともに増すとは限らない。質的発達も同様である。「愛他行動」の成否は、「愛他行動」を動機づける「愛他性」が活性化されているかどうかにかかるといえる。この調査結果は、「愛他性」の形成にかかわる要素や「愛他性」を活性化させ、内面化させよう働きかけの揺らぎの問題として捉えようのではなからうか。
- 4) Vgl. Pestalozzi, J.H. *Sämtliche Werke, Kritische Ausgabe*, hrsg. von Buchenau, A., Spranger, E., Stettbacher, H., Berlin. Bd.13. 1932. S.16.
- 5) Klafki, W. *Pestalozzi über seine Anstalt in Stans. Mit einer Interpretation von Wolfgang Klafki*. —6. Aufl., unveränd. Neuausg. —Weinheim ; Basel. 1971. S.48. クラフキーは、シュタンツの子どもたちが外的にも、またその内面においても放置されていることを「人間的なものの限界(eine Grenze des Menschlich)」と形容した。そして、ペスタロッチーの教育的努力を「教育的なものの根源現象を直接に直観させよう」ものとして評価した。人間性と非人間性の狭間に置かれた子どもたちとの出会いによって、人間本性とは何かという問いは、現実の、しかも焦眉の急の課題となって彼に突きつけられたであろう。クラフキーが評価しているように、こうした生きた経験と洞察によって編まれた彼の思想は、まさに人間教育の「根源現象(Urphänomen)」を照らすものであった。
- 6) Pestalozzi, a.a.O., Bd.17B. S.56.
- 7) Vgl. Klafki, a.a.O., S.55ff.
- 8) Pestalozzi, a.a.O., Bd.13. S.341.
- 9) ebd., S.342.
- 10) ebd., Bd.17B. S.66.
- 11) ebd., S.65f.
- 12) ebd., S.65.
- 13) ebd., S.64f.
- 14) ebd., S.76.

- 15) ebd., Bd.12. S.8.
- 16) Vgl. Meier,Urs-P. : Pestalozzis Pädagogik der sehenden Liebe, Zur Dialektik von Engagement und Reflexion im Bildungsgeschehen. Bern und Stuttgart. 1987. S.330ff.
マイヤーは、ペスタロッチーの「愛」の理解には放棄しがたい次元があると指摘する。それはすなわち、「好意 (Wohllollen)」がその動物的本性に付随する弱さを克服してはじめて、「愛」の確証となるという知見である。ペスタロッチーは、この克服すべき弱さの内実をこれらの概念で説明している。
- 17) Vgl. ebd., Bd.13. S.5f. 「あらゆるよき人間教育は、居間における母親の目が毎日毎時、その子どもの心の状態のあらゆる変化を確実に、子どもの目に、子どものくちびると子どもの額に読み取ることを求める」。
- 18) Vgl. ebd., Bd.13. S.341f. 「母親は全く感性的な本能の力から、子どもを世話し、養い、守り、喜ばせることをせずにはいられない」。
- 19) ebd., Bd.13. S.8.
- 20) ebd., Bd.17B. S.66.
- 21) ebd.
- 22) ebd., Bd.1. S.266.
- 23) ebd., Bd.17.B. S.66.
- 24) ebd.
- 25) ebd., Bd.13. S.345.
- 26) Vgl. ebd., S.14.
- 27) Vgl. Klafki, a.a.O., S.56.
- 28) Vgl. Pestalozzi, a.a.O., Bd.13. S.20. 「私は施設におけるどのようなできごとであっても、子どもたち自身と彼らの感情とに訴えた。たいていは静かな晩に、彼らの自由な判断を求めたのだ」。
- 29) ebd., S.16.
- 30) ペスタロッチーは人間本質を三つの状態（自然・社会・道徳）において捉え、その各状態の本性を相対する価値の拮抗として洞察している。例えば、人間本質の原初状態である「自然状態 (Naturzustand)」は、不幸の印象をいまだ受け取っていない「無邪気 (Unschuld)」によって規定される「墮落せざる自然状態 (unverdorbener Naturzustand)」と、自らの欲求や衝動を満たしたいとする「我欲」によって規定される「墮落した自然状態 (verdorbener Naturzustand)」とに二分される。しかし「無邪気」は、誕生の産声の瞬間から消え去ってしまう。反対に増大するのが「我欲」である。そのために人間は、欲求が満たされえない苦痛のために、ますます「無邪気」の地点から遠ざかることとなる。ペスタロッチーの理解によれば、人間の本質はまさに「我欲」に支配されているがゆえに、その克服が道徳の究極的課題となるのである。
- 31) Pestalozzi, a.a.O., Bd.13. S.20.
- 32) Vgl. Klafki, a.a.O., S.65.
- 33) ebd., S.21.
- 34) Vgl. ebd., S.20.
- 35) 産業革命によって工場制機械工業が進展し、農業を主体としていた民衆の生活は大きく様変わりした。ペスタロッチーによれば、労働に搾取された家族は家庭から引き離され、それによって伝統的家庭の教育機能は喪失の危機に陥った。また、機械工業における労働によって人間の感受性もまた硬化してしまうと考えられたのである。
- 36) ペスタロッチーは人間の能力を「精神、心情、身体・技術」として捉えており、「精神」とは「悟性 (Verstand)」を含む知的能力を意味している。

